

シンガポール活動報告書

環境情報学部 4 年 佐藤健史

活動概要

3 月 27 日、シンガポールのマリーナ地区で開催されたドローンレース「FutureMe Aerial Race」に日本からの参加者として、慶應義塾大学環境情報学部 4 年高宮悠太郎が出場し、シンガポールでのドローン事情、技術を体験してきた。また、レースでは、6 位に入賞することができた。

レースイベント概要

私が出場した FutureMe は、シンガポールの都市再開発庁が主催するアートイベント「I light marina」のうちの一つのブースである。マリーナ地区の至る所にアート作品が展示してあり、参加者は、展示物を見ながらマリーナ地区の風景を楽しむ。(図 1)

一部の作品は体験型になっており、アトラクションとして参加者を楽しませていた。そういった展示物の一つとして、今回、ドローンレースが参加費\$100 で開催された。



図 1 レースコース全体図

参加者

この大会はシンガポールの選手のみならず、マレーシア、インドネシア、ブルネイ、ベトナムといった東南アジアの選手が集まったレースで、ドバイで行われた世界大会と比べても、非常にレベルが高い印象を受けた。選手の多くは 20 代～40 代男性で、10 代の選手も見られた。

コース設定

図 2 のコースを、3 周し、そのタイムで勝ち上がっていく仕組みだ。

非常にテクニカルで、私は完走を目標に守りの飛行でタイムを重ねていった。

多くの選手は最速ラップを狙い、完走できない選手が多くいた。予選の完走率は 6 割程であった。

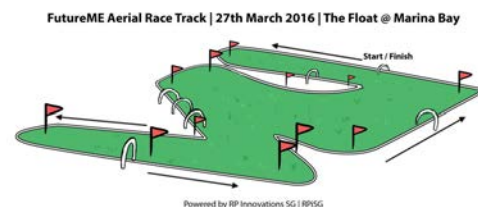


図 2 コース図

レースレギュレーション

このレースでのレギュレーションは以下のとおりである。

- ・ モーター軸間：210～250
- ・ モーター最大回転数：2300KV
- ・ バッテリーセル:4S
- ・ ビデオ送信機の帯域:出力 5.8Ghz 25mW
- ・ 送信機の帯域：2.4GHz

国際的なルールになりつつある IDRA のレギュレーションとは別で、シンガポールで独自のレギュレーションになっており、ドバイで開催された WDP と比べると非常にシンプルで、分かりやすい。特に、HD カメラを積載する必要がなく、その分スピードは早かったように思える。今後、シンガポールでのレースが独自のレギュレーションで発展するのか、IDRA に準規した形に修正して行くのか、とても興味深い。

エンターテインメント性

日本国内ではあり得ない立地の良さと、充実した設備で、選手としてとても楽しむことができた。しかし、観客に対しての配慮は乏しかったように思える。

レースコース周辺には関係者しか入れず、観客向けのスクリーンは準備されておらず、コースの横のかなり離れた場所から見物することしかできなかった。一度足を止めて興味を持った観客は多かったものの、何をやっているかわからず、しばらくすると立ち去っていた。

ドローンレースは、プロペラの危険性から、観客席をコース近くに置けない。また、ドローン自体が小さいために、レースの状況を把握することが難しい。こういった問題は、ドローンレースを普及させる際の足かせとなっており、規制のあるない関係なく、海外でもその問題点は共通であった。

現在、ドローンレースは、ドローン自身の技術ではなく、その使い方を考えるフェーズになりつつあるように思える。